

令和6年度第5回清瀬市社会教育委員の会議 議事録

令和6年度第5回清瀬市社会教育委員の会議が令和6年12月24日に開催された。
出席委員、議事の概要は次のとおり。

日 時 令和6年12月24日（火）午前10時から11時まで

開催場所 清瀬市役所本庁舎 2階 会議室2-3（対面開催）

出席委員 （対面参加）
倉持議長、西田委員、玉置委員、永嶋委員、長沼委員

欠席委員 齊藤副議長、松山委員

事務局 生涯学習スポーツ課 古川副参事、成田

次第1 開会

事務局より

- ・開催方法の確認（対面開催、齊藤副議長、松山委員は欠席）
- ・資料の確認

2 議題

- （1）不登校支援について
- ・不登校支援ネットワークづくりについて
 - ・教育委員との懇談会に向けて

3 報告等

- （1）令和6年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会交流大会・社会教育委員研修会（令和6年12月14日開催）の報告について

(倉持議長)

それでは令和6年度第5回清瀬市社会教育委員の会議を始める。今日はこの社会教育委員の会議後に、教育委員との懇談会があるため、連続となるがどうぞよろしくお願いする。

それでは議題の不登校支援について、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

これまで、市内で不登校支援の関係でどのようなことが行われているかということも議論した。今後の不登校支援のネットワークづくりに向けて協議を進めていくため、今日の懇談会についても、これらを踏まえてお話しできればと思う。

(倉持議長)

4ブロック研修会と並行して、去年の教育委員との懇談会で教育長から、不登校支援のネットワークづくりの必要性について、社会教育委員でも検討して欲しいというご意見をいただいた。清瀬市内の不登校支援施設や団体については、地域による支援の差もあるということが分かった。不登校支援を充実させ、子供の居場所づくりを広げていくことや、関わっている方々をバックアップしたり、そこに人を増やしたりなど、横になげるような取り組みを考えていけたら良いというようなことを、社会教育委員の会議で検討していた。

今日この後、教育委員との意見交換をするにあたり、今年1年弱に亘って社会教育委員の会議で検討してきたことをもとに、前回の会議で、ブロック研修会のやり方がとても良かったから、そのやり方も踏まえたネットワークづくりの第一歩のような機会が作れると良いのではないかということ話をし、そういった経緯と提案をまとめたものが、教育委員と社会教育委員の懇談会資料となる。昨年度の懇談会を踏まえ、社会教育委員の会議で検討してきた。

不登校支援について、それぞれの主体によって参加される方も違う。それぞれの特性を生かした強みがあるので、拡大や拡充をしていくということも大事だということが分かった。前回は学校内と学校外にあるというようなざっくりとした括りをしたので、それも踏まえた。

学校内では、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの配置がなされていたり、校内の別室登校の教室が保護者や住民を中心に運営されているというようなものがあった。

学校外では、フレンドルームや教育相談室、また、全ての情報を把握しているわけではないが、相談窓口で子供の居場所や子供劇場、ウイズアイなどのNPO団体による活動もあったことが話し合いの中で分かった。

子供の居場所や保護者の交流の場など、学習支援活動を子供向けだけではなく、支援

者向けの連絡会やネットワーク作りにも取り組まれているということで、カテゴリーを大きく3つに分けた。既にこれだけの活動が、色々な層に向けて行われていることを確認できた。このような不登校支援について、子供の居場所づくりに関わっている行政も、様々な部署が関わっていたり、市民や地域団体も様々な方が関わっているのので、学校内外で活動している様々な主体同士が、事例を通して現状を共有し合ったり、ネットワークづくりについて検討し合うような場があると良いと思う。

不登校支援に関わる様々な人や部署、組織や団体が、お互いの取り組みや成果と課題について、情報交換して交流することで、お互いの強みが分かったり、新しい場面に繋げたりすることができ、4ブロック研修会でもやったが、担い手や関わる人を増やしていくには、子供の支援に関わることへの市民の関心を喚起し、支援する人材の発掘や育成につなげるという狙いを含めたネットワークづくりに向けたイベント企画をやると良いのではないかとということを話し合った。

社会教育委員としての任期が来年の10月末なので、私たちの任期の間に何か形にし、チャレンジをしてみて、その成果を踏まえて次に引き継いでいくというようなことができると良いと思っている。ただ、年度内はもう難しいので、今年度に教育委員に投げかけて、そこで意見もいただき、今年度に練り直し、新年度になったら事業を実施したい。

実施後に反省を取りまとめて次の年度に引き継ぐという感じで、夏ぐらいまでには実施できれば良いと前回の会議で話し合った。4ブロック研修会でやった事例を聞いて、その事例を踏まえてグループごとにディスカッションをするという取り組みの手応えがあったので、その方法を生かし、市内の不登校支援の取り組みの事例報告と、グループの情報共有と意見交換という二部構成にして、事例報告は3事例ほど、異なる活動の方の話を聞き、そこで市内の不登校支援の取り組みの現状や課題、ニーズについて具体的に紹介をしていただく。後半のグループ活動では、様々な関係者の方が交じり合うようにグループを組んで、示したテーマで話し合う。このような形で不登校支援ネットワークづくりに向けたイベント企画をやれたら良いと思う。場所についてはアミューホールをイメージしている。学校内外、様々な関係者や関心のある方に参加いただくといいなということを思っているのので、いつぐらいの時期に開催したらよいかなど、具体的に何かアイディアを出していただきたい。教育委員との懇談会で意見交換ができれば良いと思いこの資料を作った。もう少し明確にした上で、教育委員に投げたいと思うので、皆様ご意見をよろしく願います。

(永嶋委員)

不登校の最終的なゴールはどこなのか。登校を目指すのか、それとも何かそれ以外に例えば登校しなくてもいい場所があればいいのかというところで方向性が違ってくるかも知れない。このことについて、お分かりの方はいらっしゃるか。

(長沼委員)

小学校の校長をしていますので、常にそういう現実と向き合っているが、まず小学校と中学校で状況が違うのだろうと思う。

小学校でいうと、できれば学校に登校してもらいたい。ただ、段々と高学年になるにつれて、不登校の不登校気味が、完全不登校のような状態になる傾向がある。だからその子が何を目標にしているのか、親御さんがどうしていきたいと思っているのか、ということが、なかなかはっきりと分からないことが多い。

例えばその子が、高校は絶対に入学したいとか、こんな大人になりたい、こんな仕事に就きたいなど、そのようなことが何かははっきりと分かれば良いが、日々こう何となくぬくぬくと過ごしていけばいいみたいな雰囲気があったりする。非常に微妙な言い方だが、もう家にいればある意味自分のやりたい放題というか、たぶん居心地が一番良いのだろうと思うのだが、所謂ひきこもりなど、多様な感覚なのだろうと思う。それに対して後者は、打つ手がもうほとんど何もなくお手上げ。子供に言われるがままになってしまうというのは、こう見ていると、そのような状況は共通するのかなという感じもする。そうすると、それをどうやってこっちに、外に引っ張り出してくるか。学校だけではとても難しく、窓口が狭すぎる。保護者とも元々つながっていないと思う。そうなることややはり、子供や保護者とつながる人を作らなくてはいけない。作るというか、元々あれば一番よいと思うのだが。学校としては外部機関、子供家庭支援センターやS S Wなど、そういう方と連携を取って関わっていく。つまり、ゴールが見えずに暗中模索状態が続くというのは、小学校高学年から中学校が長く、非常に難しい点。15、6年ぐらい前だったら、学校に行くと楽しいよ、友達が待っているよ、勉強ならもう1回教えるからね、など、そのように言って何とか引っ張り出す環境ができたのだが、思春期に入ってくる時期から、難しさがどんどん増していくようだ。大きくなるともう完全にひきこもり状態になってしまう感じで難しい。

(倉持議長)

外に引っ張り出す。その取っ掛かりを見つけるために、学校以外の環境で先生以外の人たちが、色々な窓口やその場を作って、そこで、このようなところに関心があるとか、このようにしたらアプローチができそうだというところを共有していけば、学校や他からも色々とアプローチがし易くなる。

(永嶋委員)

やはり、親としては学校に行かせたいと思うが、色々な事情があって子どもは行かない。親も悩ましいと思う。学校側としても、やはり学校に来てもらいたいと当然思う。何かそこを統合するのがいいのか、それとも、何か他の道があって、他に居場所があり、そこへ行って何か目標を見つけられればそれで良いのか、ということをととても悩む。

今、私の職場の大学でも、ゼミ生に不登校だったという学生が非常に多い。例えば3年生で、これまでに不登校を経験していて、本当は留年をしている学生がいる。でも、あまりそれを人に言いたくない人が、お互いに年齢は明かさずに3年生だと言っている。

今、ゼミの活動や大学の活動で、ヤギを飼っているが、それをやることによって今まで不登校だった学生などが非常に関心を示したりする。授業には来ないが、そのヤギの世話には来る。大学生ですよ。

それから、大学にスクールソーシャルワーカーが入っているが、ソーシャルワーカーのところには来ている。学生からも、行くのが面倒くさいし行きたくないが、ヤギがいるから行くのだという学生もいたりする。本来は勉強をするのだが、自分が他にやりたいことを見つけられる、そういう経験が何かとても足りないところもあるのではないかと私は思っている。家にひきこもってしまうと、外に出て何も経験しないので、余計に色々なものと触れ合わない。何か機会があって外部とつながっていれば、これは面白そうだな、などと感じることができる。

そこで思ったのが、支援には不登校の様々な関係機関が集まるが、関係機関ではないところも様々に入っていれば、また何か支援としてつながることもあるのかと思う。

大学で飼っているヤギは、元々は作った畑に生えてきた草を食べてもらうために購入したのだが、何か人を集めたり、人を癒したりする効果が随分高いと感じた。農業という視点から入り、たまたまそこに辿り着いて、農作業をするということで、授業とは関係ないが、種を植え、他に楽しいとか、自分の居場所を見つける学生もいるのかと思う。少し違う形の、不登校とは違う機関、例えばスポーツ団体などにも入っていただくと面白いのかと思う。どこにそのアンテナが動くか分からないが、色々と提示してみると、どこかに引っかかってくるのかも知れない。

(倉持議長)

小中学校は同質の集団、同質の人たちの中での社会。今の子供たちには様々な世代や様々な社会の人たちと関わるということは、非常に重要ではないかと思う。

昔はそのような多世代の家があったが、今は家族の単位が小さくなり、親の世代以上の世代と関わることや、異質の集団と関わる経験が少ない。そのような機会を提供することが直接的な解決にはならないかも知れないが、自分で道を見つけて行くような取っ掛かりにはなるのではないか。それをきっかけに意欲や関心が喚起され、将来何になりたいから学校に行って勉強をして、そういう仕事に就くなど、そのようなことになるかも知れない。何がきっかけで関心が引き出されるか分からないから、選択肢として色々なものがあると良いと思う。

(永嶋委員)

やはりキーワードは体験、触れ合い、直接体験。オンラインではないということ。そ

の場に行ってその空気を味わいながら、そこで感じること。

私は高齢者福祉が専門だが、言い方は少し乱暴になるが、どうしても高齢者福祉の人は高齢者福祉のところからしか見ない。色々な分野があるのだが、それぞれも同様だと感じる。教育の方は教育というような見方をすると思うし、不登校支援の方は不登校支援の専門だから、その視点で見る。そうするとどうしてもあまり幅がない。違う視点からの見方があって、初めてそのような面白い発想が生まれることもある。そのようになっていくためには、一見関係ないような様々な人や、様々な機関が関わったりすれば面白いと思いますし、不登校とは関係ないと思われるようなところの方々にも、このような問題、課題を知っていただくことは嬉しいことだと思う。

（倉持議長）

4ブロック研修会での社会福祉協議会の話なども大変興味深かった。高齢者の支援だが、子供と一緒に参画するとか、そこに関わった子供がまた担い手になっていくなど、そのような話でとても良かった。ターゲットが高齢者だけではないというところや、福祉だが福祉だけではないといったような仕組みが大変良かった。高齢者にとってもそのような様々な世代が関わることによって元気になったり、自分が社会とつながったりする。狙いは不登校支援なのだが、様々なジャンルの様々な行政で活動している方や、異なるジャンルの団体などにも来てもらい、子供たちの体験の場のようなものを提供してもらうことで、お互いを活性化できないかと考えている。どう呼びかけたら来てもらえるのか。子供たちの体験を増やすような取り組みをして、不登校支援の団体にも入っていただき、様々な体験をさせたい。その中で話題として、不登校について話をするなども良いかと思う。子供たちにそのような直接体験の場や機会を持ちませんかと広げてみる。そこで不登校の子供や、不登校だけではなく様々な困難を抱えている子供の話になってくるのかも知れない。多様な子供が参加でき、気になる子供がいたら支援につながってもらえるような仕組みになれば良いと思う。

（西田委員）

私はそのような場に参加させていただいたことがあるが、同じ空間に高齢者や子供など地域の方が来て、必ずしもそこで会議が生まれるとは限らないが、見ているとやはり子供は子供で固まっていて、高齢者は高齢者で固まっていると感じた。ただ、同じ空間を共有しているということで接点は持てると思った。何かそのような共有できる空間づくりが大切だと思う。そこから徐々にそれぞれ自然な触れ合いが生まれていくと良い。ガチガチの関係ではなく、顔見知りぐらいの、地域の「ゆるいつながり」という表現を良くされると思うが、何となく知っているというのは、子供たちを守っていると感じる。あまり干渉されず、そのような感じが良いのかと思う。行ってらっしゃいの挨拶だけで子供たちが安心するというような、ぐいぐい行きすぎない感じの関わり方。最初の取

っ掛かりとして、まずは参加する場があるというのは良いと思う。関わって欲しい度合いが子供たちによって様々なので、関わって欲しいところには、関わり方を深めていけば良いと思う。このような関わり方は1つのパターンだけではなく、個々の対応になってきていると感じている。

実際に毎年やっている体験の場がある。今は中学生になったが、不登校でひきこもりをしていた子供がいる。里芋掘りやさつま芋掘りの体験があるのだが、団体になると彼は来られない。あなたたち親子のために農家が収穫させてくれるが、どうですかと提案したら、今年は2回家を出た。子供に対して、何か外出の機会を作るということが必要だと思った。そのために、アウトリーチとして大学生を連れてゲームをしに行くとか、話をしに行くとか色々と提案をしている。

(倉持議長)

それはすごい。そのご家庭のために農家と交渉をして、この日のこの時間にと予約をするという感じか。

(西田委員)

引率する大人や車が必要であれば手配をする。それをコーディネートしているのは、地域の社会福祉士や子供食堂関係者、児童養護施設やNPOなど、色々なところが連携している。開催したいが対応できる人はいないかと周知され、方々を当たっている。ウイズアイだけでやっている話でもないのだが、このつながりから支援者連絡会が生まれた。その支援者連絡会のメンバーは割と密に連携が取れているので、支援者連絡会の中でそのお子さんの一つ一つの事例検討が共有されているので動きやすい。

(倉持議長)

そこまで個別で対応しているのは凄い。引っ張り出す当人によって関心が違っていたり、その他のスタイルやカラーが違うから、少しでも「楽しそうだ」と関心を持ったと言ってくれたところに、みんなと一緒にだから無理だなということではなく、守り、出て来られる環境を作ろうとしているところ。

(西田委員)

子供の支援団体と農家とを考えた時、本来はあまりつながらないネットワークだと思う。どうしても不登校支援の団体は不登校支援、高齢者福祉は高齢者福祉となり、固まりが違う。そうすると何か考え方というのは、対してあまり変わらないので、広がりを持たないような気がするが、色々な違う分野のところがこのように関わってくると、そういう活動の中で広がってつながることもある。

今、障害者施設のグループホームの方で30歳の方がいるが、その方の事例検討をや

り、ある施設の公認心理士の方がその方もサポートしつつ、定期的には子供食堂で子供たちと関わっている。関わりの中で、今ではお菓子屋さんになりたいと思い始めていて、ちょうど先月から、私と一対一でクッキー作りをしている。作ったクッキーを子供食堂に提供している。やる事がとても多くなるが、全部やり、やはり生き生きとしていく。自殺傾向という形だったから、今は生きる方向を見ているということが、とても良かったと思う。支援の仕方というのは、ここ数年で生まれたわけではなく、多分清瀬は昔からあるような気がする。

昔不登校をしていた子供たちがいる。当時小学校二、三年生くらいの姉妹だが、彼女たちも年に数回お菓子作りをやった。姉妹のためにずっとお菓子を作り、家から出られて子供食堂に来られる段階になった。今年、下の妹さんが成人式を受け、そのときにいただいた手紙の中に、「やっぱり行きます」と書いてあった。就職も内定して、「生きる」というように変化していった。そこがゴールだと思っている。

(永嶋委員)

学校も大事だが、行かせようとしても行けない。背景なども考えたら、やはり直接の体験を増やして、社会で自分がどのように存在しているかということを確認しながら、そのような行動を増やすのが良いのではないかと思う。

(西田委員)

このようなことがやはり地域で見守るとか、地域で育てるということなのだと思う。やはり学校も大変だと思うが、向き合っていかなければならない大人たちが大変。親に殺されると言って家を飛び出してくる。そういうこともある。「生きます」と自分で書いたということが凄いなと思った。やはりそこがゴールだなと思う。

(倉持議長)

色々なところに通える場所や心地よい場所があれば、地域で知っている顔見知りがあるとか、ここに行くと何かやれる、またはここから離れて何か作業ができるなど、そのようなところがあり、ここが楽しいから他のことを少し乗り越えられる、もう少し頑張ってみようかなと思えたりする。頑張らなくても、続けてみようかなと思えるなど、そのようなことが色々あるということが、長い目で自分を見守ってくれる地域があるということ。サポートしている学校と、その他にも色々支援の場があるという極端な例だ。

関わって受け止めてくれる側もどんどん広げていけると、地域で一緒に子育てしているという感覚も出るだろう。

ただ、小中学生のお子さんと、そのように出かけたりするとなると、やはり保護者との連携は必要で、いかに保護者と良い関係を築けているかというところが一番大変だと感じた。子供と関わるだけ保護者とも関わる。支援する同士がつながっていると、その

中に専門家がいたり、公的に来た人がいたりすると、そこまではしなくていいとか、そういうことは少しフォローしましょうなどとなる。そういう意味では、そのようなネットワークがあるというのは、支援する側も安心できる。支援者の支援というのも大事な視点だと思いますし、そのような話ができる場があるというのは大事だと思う。

(玉置委員)

色々と考えたら、ゴールの話もそうだが、昔は不登校だったという方の話で、今は不登校ではないという話があった。昔は不登校だったが、今は普通の社会人として自立できている方、そのような方の意見を集めた方が良いと考えている。何も知らない一般的な知識だけの人から、なぜ行かないのかと言われるよりかは、実は自分も昔は不登校だったが、こんなことを知って、こう変わったよというように、こんなことをやってみればと言って体験の場を提供し、実体験やプロセスを経験させる。

当事者だった方のエピソードを聞くと、具体的にイメージができて、この人なら話してもいいのかなと、心を開いてくれるのかと思う。きっかけ作りとして、そのような環境を作った方が、ただお偉いさんが集まってプロジェクトをやるよりかは、実体験をした方が良いかと思う。経験した方が、こうなったら、こうになってしまうよ、でもここで頑張れば、私みたいにちゃんとできるから大丈夫だよ、というようなイメージになると思う。

(倉持議長)

子供たちの支援にそのような経験者の方にも関わっていただき、話を聞くような場があるとイメージが湧きやすく子供も話しやすい。このままではいけないんだ、と思うきっかけ作りにつながると思う。

(長沼委員)

やはりコロナ渦から、人と接しないようになった。様々な体験もできないということもあると思うが、令和が始まってから増加していると感じる。学校自体はコロナ渦前の状況に少しずつ戻ってきて、色々なことをやろうというのはある。行事も大分戻ってきている。

しかし、今の小学4年生5年生がコロナ世代で何も無かった。その影響なのか、無気力というか、それこそ家に居たらぬくぬくゲームをしてテレビを見て、という感じ。ただ理由も無く学校行かないという感じの子もいる。

(玉置委員)

サッカーを教えている子どもたちの中にも、実は学校に行っていないという子がいる。何でと聞くと、別に、と言うような感じ。理由も無く学校に行っていない。

不登校や長期欠席者に分類される基準というのは、1ヶ月など、何か基準があるのか。

(長沼委員)

基準はある。連続して来なくなる日が続いてくると、ずっと来なくなる。ただ、この曜日だけは来るなど、イベントがある日は来るというパターンもある。行事や社会科見学だけは来るなど。

ただ、担任が一生懸命そこに引っ張ってくるが、来た時にはみんなでウェルカムの雰囲気を作るなど、安心して大丈夫だという迎える側の非常にきめ細かい配慮がないといけない。逆にそこで何かちょっとしたことがあったら、もう来なくなってしまう。もっと来られなくなってしまうから、とてもリスクもある。ウェルカムの雰囲気がとても大事で、できたねという安心感が必要。それがいつもと変わらず、何も特別ではないという雰囲気。

(倉持議長)

本人は頑張っているから、頑張れよという雰囲気を出さないこと。本当に皆さん繊細な対応をしている。先程当事者の話があったが、不登校の保護者向けに講演をして、どれだけ安心するか。特に不登校が長期化している状況の保護者は安心されるのではないかと思う。

それでは、今日後半の教育委員との意見交換の場で、私から意見の経過という感じで最初に話をする。そしてこれを少し具体化して、教育委員からご意見を出していただく。教育委員のご意見も引き出しやすくなるのではないかと思いますので、やはりそのような機会を持てる場を来年度の初回にかけてやれると良いと思っている。

例えば、今の話だと不登校をメインにしないで、子供の体験の場づくりのようにしてやるといった形でもいいだろう。関心のある方や関係者の方が集まって、情報交換やエピソードなどを共有し、自分たちにもできるだろう、こうしようなどと広げて、体験をする場を提供できるネットワーク作りができれば良いのではないかと思います。そこに何かつながるように、それぞれの立場からの話をしていただく。

教育委員も関心のあるところだと思うので、今日の意見交換で1つに絞る必要はなく、今のように少しアイデアを色々とし合っていただき、出た意見を引き取って、またこの社会教育委員の会議で具体化して、話していけたらと思うがいかがか。

やるとしたらいつ頃になるか。予算もまだ付いていないが、やるとしたら、例えば誰かに登壇していただき、話していただく方の謝礼などを出す。そのような話もしなくてはならない。開催場所なども含め、企画を少しまとめる。ネットワークを作るとなった場合、どのような形で呼びかけをして集まっていただくか考える必要もある。ネットワーク作りそのままだが、社会教育委員の役割かどうかは分からないが、ネットワーク作りに向けた交流や意見交換の場を、まずは少し持ってみるというのが今回の趣旨となる。

生涯学習担当課で準備を担ってもらうのが現実的に可能かどうか、そのようなことも出てくる。学校教育や学校教育以外のNPO、福祉の部署など、様々な部署が関わっているので、それを広く社会教育や生涯学習というように捉えて、横断的なネットワークを社会教育で担うというのも1つの役割だ、というような話が出るかも知れない。

以前、社会教育委員の会議で市民文化祭の話があった。人が固定化し、特定の団体の人たちしかいないと。新入会員募集とあっても結局は外部からは入りづらい。今までいる人同士で固まってしまい、新しい人が入ってこないため、どんどん高齢化している。外部に門戸は開いているのだが、入りづらい。そのようなところも外に開いて、子供たちも色々と体験できたりする場があると、とても面白いと思う。そのようなところから後継者が出てくるかも知れないという気がする。

子供が子供を媒介し、広がりやすいかも知れないので、自分たちがやっている活動を子供たち向けに少し考えて、広げていただきたい。そこに応募者や支援をする人が一緒に来ることで広がっていくこともあるかも知れない。

この間、学生の授業活動の一環で、学生が企画して様々なイベントをやるというものがあった。その中の1つに、立川市民に立川音頭を覚えてもらうというイベントのブースがあった。他のブースは子供向けの工作などなのだが、そのブースだけ大人からの問い合わせが多くあった。冬なのだが、シニアの方が浴衣を着てくれて、東京音頭を取ってから踊るというのを皆でやっていた。それを見ていたら、工作に来ていた子供とその保護者たちが、輪にどんどん入ってくる。子供には少し難しい振付も覚えられていて、保護者が結構若いお母さんたちなのだが、音頭をマスターして、気に入ったみたいでずっと音頭を取っている。そこに大学生も加わって踊っているから、様々な世代がいて、見ていてとても面白かった。多少踊れなくても、様々な人たちが一緒になって踊っているという何か不思議な一体感があった。シニアに人気で、覚えたいとのニーズがあってシニアが踊るのだが、それを見た若い人や子供たち、親世代と一緒に参加できるという世代を超えたつながりのような緩やかさを感じた。

(西田委員)

小平の放課後子供教室の見学に行った。放課後子供教室の一部として、市民が大正琴を教えるコースがあった。私が見に行った日は発表会の日で、子供の学年に応じて自分で曲が選べるようだった。数人が発表をしてくれたのだが、あれはもう上手い下手ではないと思った。座って挨拶から始まり、大正琴を弾いて、終わりにお辞儀をするというその一連の作法のようなものも含めて教えている。大人や子供がシニアから学んで、楽器に触れ、皆で聴き合って、拍手をして終わる、そのようなことを学んでいるのだなと思った。そこからもしかしたら関心も生まれるかも知れない。大人もそうやって教えることで、上手い下手ではない部分もあり、教えるのは面白いのではないかと思う。

(倉持議長)

そのような機会もあって、実際に触れたり、体験したりできるというのは大事だと思う。世の中には色々とあるということを子どもたちは知らない。

では、議題は以上となる。次に報告をお願いする。

(事務局)

12月14日の土曜日に、町田市の市民フォーラムで、令和6年度の東京都市町村社会教育連絡協議会の交流大会と社会教育委員の研修会が行われた。今回は代表ブロックの幹事市だったということで、各市ブロック研修会の実施報告において、倉持議長にお話しいただいた。その後に社会教育委員の研修会として、生涯学習と学校教育の連携について、町田市の事例紹介のパネルディスカッションという形で、学校支援員の関係を中心にお話しいただいた。当日の資料とスライド資料は先日メールでお送りしている。

(倉持議長)

当日私が発表して参りまして、各ブロックもとても充実した研修をしていて面白かった。私たちの発表も皆さんに関心を持って聞いていただけて良かったという感じだった。これで次の当番まであと5年は回ってこない。皆さん色々ご協力いただきありがとうございました。PowerPointの資料を付けていただいたので、地域の特性が見られて面白かった。新しい図書館を作った多摩市も興味深かった。他市の方が見学して、多摩市と協力して、何かそこが生涯学習の学びの場だということで、講座だけではなく、交流のようなものを多く取り入れてやっているところが多かった。事例などを聞きながら交流し、話し合いをするという形で各市ブロック研修をやられていた。

当日ご挨拶をしてくださった小平市の先生から、清瀬市良かったですよとまた声をかけていただいた。

報告は以上となる。その他何か連絡、報告事項等はあるか。

(事務局)

来年度の会議の日程調整をしたいと思っている。都合の悪い曜日などがもしお決まりでしたら教えていただきたい。

皆さんの任期が10月までとなっている。年間を通して会議の予定を立てるので、年間で6回ほどの会議を予定している。5月、7月、9月、10月、皆さんいかがか。12月が恐らく、今日のように教育委員との懇談会の場合という形になると思う。

(倉持議長)

任期の切り換えが10月で、継続の委員は12月。新規の委員は懇談会からの参加となる。

(事務局)

皆さんのご意見を基に、こちらでも会議室等の調整させていただき、原案をお示しできればと思っている。次回の会議は2月ということもあり、またもう少し来年度が見えてくると思うので、再度ご相談をさせていただきたい。

(倉持議長)

以上で令和6年度第5回清瀬市社会教育委員の会議を終了する。